

評価の観点	評価項目	達成状況	本年度の取り組みと改善の方策	学校関係者評価
				コメント
① 基礎基本	わかる喜びのある授業づくり	B	今年度も『『読み取る力』をつける』ことに重点を置いて研修を重ねた。読み取ることについて継続して取り組んだ読解力トレーニングによって、初見の文章をすらすら読める児童が増え、それに伴って大まかな内容を捉えられるようになってきている。読み取ったことを基に、自分の考えをもつ段階の次にはペアで考えを交流する、ノートを見て回る、タブレットを利用するなど、様々な方法を用いて自分の考えを伝えることができ、伝え合う喜びを味わう授業へと展開することができた。来年度も、研究・研修し、「わかる喜びのある授業づくり」へとつなげる。	近年、生活環境の変化や様々なメディアの発達・普及などを背景として、「読書離れ」「活字離れ」が指摘されている。変化の激しい現代社会の中、自らの責任で主体的に判断を行いながら自立して生きていくためには、必要な情報を収集し、取捨選択する能力を、身に付けていかなければならない。わかる喜びのある授業づくり目指して読解力トレーニングに取り組まれていることが分かった。
	個に応じたきめ細かな指導		兵庫型システム、加配教員、学習支援員、スクールアシスタントで支援の必要な児童を中心にかけわり、学力の向上に努めている。中・低学年では、「がんばりタイム」に個別の支援が必要な児童を集めて反復練習による基礎学力の定着ができています。	子どもは自分が興味のあるオモチャのパンフレットやちらしはじっくり見ます。たとえば、料理が好きな子はレシピを読もうとします。様々な音読の資料を使うことは、様々なタイプの子どもの興味を引くことになる。単に学校だけでなく、学校・家庭・地域社会が、それぞれ適切な役割分担を果たしつつ、相互に連携して行われることが重要であることを周知してほしい。
	家庭学習への取り組み		昨年度に引き続き5回の家庭学習強化週間を設け、家庭と連携し、望ましい家庭学習を推進した。1つめの目標であった学年×10分+10分間の家庭学習時間を各学級80%の児童が達成できている。チェック表の項目は、学習アンケートとリンクしており、課題のある項目については、研究推進委員会で具体的な手立てを講じているところである。	
	朝の学習への取組		読解力トレーニングでは、低学年ではプリント、中・高学年ではタブレット端末で文章を配布する形で進め、つまり読む→速く読む→5W1Hが分かる→話の大体が分かる→感想(考え)がもてるということをめあてに児童のスキルアップを図った。その際、簡単な文章から始めたり、ゲーム性を取り入れたり、楽しんで活動できるようにした。しかしながら、今年度は読解力トレーニングに十分に取り組むことができなかった学級が複数あった。そこで来年度からは、4月から読解力トレーニングを開始し、運動会の練習や駆け足運動など学校行事で朝の学習に取り組めない時期を除いて足並みを揃えて組織的に取り組んでいく。	
② 道徳教育 人権教育	規範意識や道徳的判断力を高める授業	B	日頃から教師として人権意識を高くもち、教育活動にあたった。特に、児童のことは「さん」付けで呼ぶこと、授業の中では標準語で話すことを意識した。道徳指導においては、中町スタンダードの共通理解を図り、どの教師がどの教室で授業を行っても、同じ流れで授業を進められるようにしていきたい。	「スシロー」店内での迷惑行為を撮影した動画がSNSで拡散している件がある。難しいとは思いますが社会の安定的な維持と、善良かつ健全な生活の営みを維持するため、社会的な道徳観念を早いうちから子どもたちにも教えてあげてほしい。
	自己を高め、友だちを思いやる心や態度の育成		にこにこ集会の作品作りを通して友だちや周囲の人々を大切にしようとする心を育てたい。児童の言葉で人権課題を伝えることは理解しやすく心に響くと思われる。今後も継続して全校挙げて取り組みたい。	
	道徳の教科としての評価		1、2学期の評価については、発言や態度、道徳ノートへの記述などから根拠を明らかにして懇談会で話すことができている。3学期には年間を通じた道徳の時間の取組の様子と、学びの姿を伝えていく。	
③ 特活 学校行事	いじめを許さない学級作り	B	毎学期「いじめ」の授業に取り組んだ。学年に合わせて、いじめの理解やいじめの四層構造について学習を進めた。また、月1回の学校相談シートや学期1回の面談を行うことで、風通しの良い学級作りに取り組んだ。来年度は、オープンスクール等でいじめの授業や心の授業を入れ、子どもたちだけでなく、保護者にも伝えていけるようにしたい。	いじめなどの授業を集中して行う場合、道徳の内容を確保するため、項目を組み合わせてもよいのではないかと。PTAの講演会で筒崎さんの講演、ネットゲームやインターネットと人権の学習をしたと聞いた。もっと保護者にも関心を持っていただきたい。
	児童の主体性を重視した活動の充実		6年生を中心に、1年生仲間入り集会、異学年交流遊び、ウィンターフェスティバルを企画した。特に、ウィンターフェスティバルは、新型コロナウイルスの影響で、他学年とふれあう機会が少ない中、全校生が楽しめる時間になったことや高学年としての自覚が育つ良い機会になった。	
④ 特別支援 教育	特別支援教育に係る研修の充実と共通理解	A	本年度は難聴児に対する理解を深める研修を行った。通常学級に在籍する支援を要する児童への指導については、教室でできる工夫や教材、教具の紹介など、個に応じた手立てとよりよい支援の方法について学ぶことができるような校内研修をしたい。	発達特性のある子どもの指導・支援を充実させる上で必要な関係機関として、教育委員会や特別支援学校の協力があることを聞いた。難聴児の研修以外にも発達障害の研修なども企画していただきたい。
	一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援		サポートファイルをもっている児童や各学級で課題のある児童については、効果的な支援方法やサポートファイル作成の指導助言を受けた。必要に応じて専門機関やスクールカウンセラー、アイ・あいスクール等につなぎ、よりよい支援をすることができるようになっている。今後も個に応じた支援ができるようサポートファイルや支援計画・指導計画の見直ししながら支援を続けていきたいと考える。	
⑤ 安全・防災 健康・食育	生命を守る安全教育の推進	B	登校指導と下校指導を実施した。課題があれば、その都度、地区担当教師や関係の担任教師が連携して、児童に安全な登下校について指導することができた。交通安全教室では、3年ぶりに実技訓練を行った。警察の方にも来ていただき、1、2年生は歩行訓練、3、4年生は自転車訓練を行い、安全な歩行の仕方や自転車の安全な乗り方を学ぶことができた。	道路交通法の一部改正により、全ての自転車利用者に乗車用ヘルメットの着用が努力義務化されるとのこと。普段からヘルメットを着用し、大切な命を守るよう啓発をしてほしい。また、登下校のあいさつは続けてほしい、学校のイメージアップにもなるし防犯にもつながる。
	実践的な態度や能力を育てる防災教育の推進		今年度は年3回(火災、不審者対応、地震)の避難訓練と1月の防災学習(キッズ防災検定を含む)を行った。コロナ禍において、未実施となっていた不審者対応の避難訓練は4年ぶりであった。チャイムが連続で3回なれば不審者侵入の合図であることを、児童は確認することができた。来年度も様々な状況を想定した訓練を行っていきたい。	

⑤ 安全・防災 健康・食育	健康に関心を持ち、体力向上に取り組む児童の育成	B	家庭学習チェック週間に合わせて、学期に1回「元氣もりもり大作戦」に継続して取り組んでいる。テレビやゲーム、YouTubeの視聴時間についてもチェックしたが、学年が上がるとつれてメディア利用時間が長く、就寝時刻も遅くなる傾向がある。特に休日や長期休暇中の利用が多い傾向だが、学校でも日常的に学習でタブレットを使用しており、視力低下への影響も心配される。メディアとのつきあい方について、学年に応じた指導をしていく必要がある。なわとびチャンピオン大会は数年していないが、休み時間に練習している児童も多い。	給食着を使い回す習慣、白い白衣、帽子のセットが給食係に貸与され、1週間ごとに交代し、保護者が洗濯をして学校へ持参する仕組みのもうやめてはどうか。 個人持ちにすると保護者負担が増えることになるが、給食センターとしては帽子、袖通しががそろえばよいとのことで検討してほしい。
	望ましい食習慣の育成		栄養教諭や地域の人材を招いての食育指導が難しく、動画配信を利用して行った。来年度は、感染状況も考えながら、食育について栄養教諭による指導を増やしたり、保健だより等での保護者に啓発も継続する。給食では、食事のマナーや好き嫌いせずに食べることを、各クラス複数の教師で指導している。家庭とも連携しながら、来年度も継続していく。	
⑥ 生徒指導	挨拶、掃除等の基本的な生活習慣の確立	A	生活指導委員会と児童会・代表委員会が連携して生活のめあてを設定した。月に1度の朝会で生活指導担当から全体指導をし、そして各担任が学級指導を行い定着できるように連携して指導を行った。今年度から、代表委員会の組織を児童会だけでなく各委員会の部長も委員として編成した。6年生が中心となり、学校生活の課題を見つけ解決に向けて取り組む具体策を話し合うことができた。	近隣市町より挨拶がしつかりできていと聞く。一般的に子どもというのは思春期が近くなるにつれ、人と接することを恥ずかしがったりする傾向がでてくる。
	子どもと向き合い、子ども理解を深める生徒指導の徹底		毎月末に「生活のふりかえり」としてアンケートを実施した。また、各学級担任には毎学期担任している児童との面談を実施し、相談したり、話したりする時間を設定し、児童の声を聞ける機会をもうけた。個人面談は、相談がなかったとしても教師と児童が個人的に話せたという経験が心の安定につながるので継続していく。	高学年・低学年問わず「挨拶をする子・しない子」は一定数いるように思う。子どもの生活習慣の改善やしつけなどについては、家庭だけでなく学校や地域単位で取り組んでいくべきではないか。
	不登校ゼロ、いじめゼロの実現		いじめゼロを目指し、毎学期いじめの授業、面談、月1回の学校相談シートを活用した情報収集に取り組んだ。それをもとに、いじめ対策委員会を月1回開き、職員間の共通理解を図ってきた。また、トラブルがあった時は、臨時でのいじめ対策委員会を開き早急に対応した。	
⑦ 教職員の 資質向上	教育の専門家としての資質・指導の向上を図る校内研修の充実	A	今年度も国語の研究授業の事後研修会で、グループ討議の後に全体討議の時間を設定した。昨年度に引き続いて同じ講師を招聘したことで、研修に一貫性と厚みのある積み上げができた。全国学力・学習状況調査の結果の分析を生かし、本校児童の実態に合った指導ができるように取り組んでいく。また、校務支援システムやタブレット端末の研修を情報担当が中心になって進め、職員・児童ともにICTスキルが徐々にアップし、活用が進んでいる。	タブレットの活用で集まらなくても集会ができたり、動画やイラストでわかりやすく説明できたりする。また、アンケート機能も活用できているようだが視力低下などの健康面やいじめにつながるような使い方をしないように、メリットデメリットを考えてカリキュラムを組んでほしい。誹謗・中傷等を気にしていたがネットパトロール等があることが知れてよかった。
	教師としての使命感や子どもに対する愛情、責任感		サポートファイルを持っている児童や各学級で課題のある児童については、児童観察を依頼し効果的な支援方法やサポートファイル作成の指導助言を受けた。また、課題をもつ児童に関しては職員会議で情報交換することで児童に関する情報を共有し、多くの職員が支援に関わる体制をとっている。必要に応じて専門機関やスクールカウンセラーにつなぎ、教育的ニーズに合わせた支援をすることができるようになっている。	
⑧ 組織運営	教育目標達成に向けた、それぞれの校務分掌における意欲的な取組	A	コロナ禍で学級閉鎖等も度々合ったが、学校教育目標「いのちと人権を大切にし、共に学び高め合う、こころ豊かな中南っ子の育成」を目指し、各担当で責任を持ち、校務の遂行に努めている。但し、各会議の時間が長いので、タイムマネジメントを意識し会議を効率的に進めていく必要がある。	勤務時間の適正化が進められていることが分かった。さらに自分の勤務時間を正確に把握することが必要である。これまで正確に把握していなかった勤務時間を視覚化するだけでも意識が持てる。校務支援システムで教職員の業務改善を図るのはよいが、子どもと向き合う時間を大切にしてほしい。
	学校の経営方針の浸透、報告・連絡・相談の徹底と情報の共有化		組織として、学校の経営方針に基づいて、各教職員は業務に取り組んだ。『報連相』の徹底については、急を要することもあり不十分なときもあったが、職員会議等で回覧板の活用や職タを取り入れる提案を実践したことにより、改善が見られた。	
	勤務時間の適正化		定時退勤日の取組は、昨年度に比べて大きく改善している。また、年間勤務時間外時数もほとんどの教員が、昨年度より減少している。今後は、各個人が自分の業務を精選し、放課後の業務時間の確保に取り組むことが重要である。打ち合わせは別室で、個人の業務は職員室でを周知徹底したい。	
⑨ 施設・設備	学習・生活の場として適正な施設・設備等の管理・整備	B	2年間プールを本格的に使っていなかったので、様々な不具合がみられた。また、感染症になっても児童の学びを止めないように、タブレットを持ち帰るようにした。保護者の協力のもと、家庭でも授業に参加できるよう試みているが、安易に家庭から参加することにならないよう共通理解が必要を図り、研修を進めていきたい。	元々川沿いで、校舎の近くに水路が走っている。その影響でトイレが凍ったり、階段に結露が浮きやすいのではないだろうか。生活に関係する場所でのけがは大げがになりやすい。常日頃から教育委員会等に施設改修の申し出をしておいた方がよい。
	整理整頓された学びの場にふさわしい環境づくり		教室のスペース確保のため壁掛けモニターへの変更を進めたいが、県の予算では空気が清浄機を買うように予算が進められていて苦勞している。また、トイレの洋式化が進みありがたいが、外廊下で冬は水が凍って流れない、便座が冷たいなどの問題点も出ている。寒波が来る前に計画的に防寒対策ができるよう努めていく。	
⑩ 家庭・地域との連携	家庭や地域への情報発信と情報収集	B	感染症対策では郡内の状況を鑑みながら教育委員会と情報交換し、週明けに混乱が少ないよう予防や混乱防止に努めた。また、不審者情報に関しても関係機関と連携し、早めに手を打つことができた。来年度から新しいメール配信システムになるが、学校関係者だけではなく、地域の方にも情報が発信できればと考えている。	オープンスクールをしても、教室に保護者が入れないような環境では保護者も納得できないだろう。30人学級はできないのだろうか。登下校の問題が色々あると聞く、地域人材やボランティアの活用を国は進めているがそんなに簡単に人は集まらない、リスクも同じこと、国や県からの支援は望めないのか。
	保護者や地域の人々と連携した教育活動の推進		PTA活動は縮小したが、児童中心の学校活動を見直す良い機会となった。また、オープンスクールでは地域の人と連携した教育活動もできるようになってきた。図書や環境に関するボランティアを募集しているがなかなか集まらず、学校運営協議会委員の助言を得て地域の祖父母にも協力を求めている。	